

読み切り 『「文化祭演劇部発表」殺人事件』の謎

「文化祭演劇部発表」殺人事件……。

これは、今日始まったこの高校の文化祭で行われる、演劇部の発表する劇のタイトルである。

今年の脚本はすごいぞ、と演劇部の友達が苦笑いで話してくれたが、なるほどタイトルからしてすごそうだ。何しろ文化祭の演劇部の発表で、『「文化祭演劇部発表」殺人事件』を発表するというのだから。

同じ友達からの情報だが、脚本担当の生徒が、ある文芸部員から借りた本をきっかけに、どつぷりミス터리にはまってしまったそうだ。それから、ミステリの脚本しか書こうとしなかったらしい。脚本には、そのころ読んだ本の影響が大きく出ていたらしいが……。

(個人的には、俄然、気になる)

これを見ないわけにはいかないだろう。

いい席で見るといって、かなり早めにやってきたつもりだ。だが、上には上がいるということだろうか、発表が行われるホールの入り口には、すでに数人の生徒たちが集まっていた。どの生徒も、タイトルに引き寄せられてきたようだ。

並ぶ生徒は少しずつ増えていき、それなりの長さになった。それでも、人が押し寄せていると言えるほどの人数には達しない。まあ、高校生の劇にこれだけ人が集まったのだから上出来だろう。

ホールに迎え入れられると、舞台から遠すぎず、近すぎない席を選んで座り、時間が来るのを待つ。

さて、どんな劇に仕上がっているのか。推測できる内容はほとんどない。

しいて挙げれば、「文化祭演劇部発表」殺人事件なんてタイトルをつけたのだから、演劇部の発表が関係した事件になるのだろう、ということ。あとは、高校生の劇ということから判断して、メタかギャグの要素が入るのではないかと、ということ。そのくらいだ。

あたりが暗くなった。一気にホールの中が静まる。

「それでは、只今から、演劇部の発表を始めます」

ナレーションの声。それからしばらくして、幕が上がった。

舞台全体が明るく照らし出された。舞台上には誰もおらず、小道具もない。あるものといえば、もともと舞台の手前に設置されている、横一列に隙間なく並んだ舞台照明の器具だけだ。

そこに、舞台の上手——つまり観客から見て右側から、二人組の男が歩いて出てきた。一方の男は真っ黒なスーツ、もう一方は動きやすそうな私服という、アンバランスな二人だ。私服の男はせえせえ息を切らしている。対して黒スーツは涼しげな顔だ。

「ちよ、ちよつと、休憩できませんかねえ……。ある程度整備されているとはいえ、こういう山道には慣れてないもんで、そろそろ限界が……」

私服が荒い息で懇願すると、黒スーツは立ち止まって、あきれたように首を振った。そして振り向きながら、

「広津君、何を寝ぼけたことを言っているんだ。まだ十分と歩いていないじゃないか」

「……そうは言ってもですね、源川先生。先生は歩くのが速すぎるんですよ。山を平地と同じ速さで登ったりしたら、すぐへばるに決まってるじゃあないですか。せめて、もう少し速度を落としていただけましたら、ついて行けると思うんですがね……」

「一緒に行きたいと言ったのは君だよ。勝手についてきておいて足を引っ張るのかい？　なんと無責任な……」

どうやら、息を切らしている私服の男が広津、もう一人の黒いスーツの男は源川という名前らしい。

源川は肩をすくめた。

「まあいい。君の休憩を認めよう。私には、その間にしなければならぬことがある」

源川は舞台手前に向かい、一歩ずつ歩き出した。

「しなければならぬこと、というのは？」

広津が訊いた。源川は、舞台の最も手前で足を止めて、観客の方を向いたまま答える。

「もちろん、説明だ」

「説明？　誰に何を説明するんです？」

「君はわからなくてもいい。とにかく、私たちがここに来るまでの経緯を説明する必要があるのだよ」

そう言った瞬間、舞台全体を照らしていた明かりが消え、同時に広津も消えてしまった。ただ、源川の姿だけがスポットライトの光の中に残っていた。彼を照らすのは三つの照明だ。彼の真上から伸びる光と、そのやや上手、やや下手から伸びる光。

彼は観客に向かって頭を下げた。

「観客の皆さん、こんにちば。本日は演劇部の発表を見に来ていただき、ありがとうございます」

案の定、メタ要素は入ってきたようだ。高校生が脚本を書いた劇なのだから、ある意味では当たり前なのかもしれないが。

「さて、私、源川がどうして山を登っているのか、それを説明しましょう。」

事の起こりは昨日。私の探偵事務所に一通の手紙が届きました」

彼は懐から三つ折りの紙を取り出した。

「殺人の予告状です。内容は、翌日——つまり今日、この山の中にある家で殺人を犯す、というものでした。もちろん無視するわけにはいきません。山を登って、予告された家に向かうことにしました。しかし、さあ出発しようという時に広津君が現れたのです。彼は予告状に興味を持ち——何度も断つたにもかかわらず——ここまでついてきてしまいました。……そういうわけで、私たちは今、予告された山中の家に向かっているところなのです。もう着く頃なのですが……」

その時、源川を照らすスポットライトの中に、広津がひよいと現れた。

「先生、何やってるんですか？　休憩はできましたんで、そろそろ行きましょう」

そう言うと、広津はさつさと照明の外に消えてしまった。源川はそれを冷やかに見送った後、観客に向き直って、

「それでは、引き続き『文化祭演劇部発表「殺人事件」』をお楽しみください」

と、軽く一礼した。彼が立ち去っても、舞台手前を照らす三本の光はそのままだった。

舞台全体が明るくなった。

暗かったうちに置かれたのだろう、舞台の中心から少し上手よりのところに、扉があった。扉が置かれているだけで、付属されている物は何もない。扉の下手側には三人の新たな登場人物がいる。女が二人と男が一人だ。女二人は立っていて、男は舞台下手に設置された一人がけのソファにもたれかかっていた。

上手から源川と広津が出てきた。

「あっ、ここですね」

広津が立ち止まって言う間にも、源川は迷いなく進み、扉をたたいた。「ごめんください」

下手側の三人は一斉に扉の方を見た。そして、扉から近い方の女性が返事をして迎えに行った。

「はい」女性は扉を開けた。「どちら様でしょうか」

「どうも、突然お伺いして申し訳ありません。私、探偵の源川と申します」源川は名刺を差し出した。

女性はそれを受け取って、「……探偵さん、ですか？ 探偵さんがうちに何の御用で……？」

「実は、私のもとにこのような手紙が届いたので」

渡された紙を読んで、女性は息を飲んだ。

「見ての通り、殺人予告です。その様子を見ると、こちらの家には何も届いていなかったようだ」

「え、ええ……」

「失礼ですが、このようなものを送られる心当たりは？」

「いいえ、何も……。あの、家族にこのことを伝えてきても……？」

「ああ、よろしいですよ。では、私はここにいますので」

「少々、お待ちください……」

女性は扉を閉めると慌てて下手の二人のところへ向かった。

「あなた、大変よ！ こ、これ……！」

女性が夫であるらしい男に予告状を渡した。ソファに座っていた男は、目を通すと勢いよく立ち上がった、

「ど、どうしたんだ、これは」

「今、探偵さんが来たの。それで、その人のところにそれが届いたって……」

男は何度か頷きながら、「わ、わかった。その探偵はまだ玄関にいるんだな？」

「ええ」

「なら、私が出よう」そう言って男は玄関に向かった。

そこに、今まで一言も発していなかった方の女性が、

「何が書いてあるの？」

と男の妻らしき女性に訊いた。予告状を見ると、

「な、何これ！ 殺人予告じゃない！」

ショックを受けた様子で、それっきり女性は喋ろうとしなかった。

女性が言い終わったくらいに絶妙なタイミングで男は扉を開けた。

「……あなたが、探偵さんですか」

よそを向いていた源川は振り返って、

「ええ、探偵の源川と申します」

「源川さん。とりあえず、中へどうぞ」

「ありがとうございます。この——」源川は後ろにいた広津を引き寄せた。

「——広津君も一緒ですがよろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

男は源川と広津を迎え入れた。

（ご都合主義だなあ……。見ず知らずの自称探偵の言葉を信用するわけがないのに。まあ、仕方ないといえば仕方ないけど……）

男は源川たちを女性二人の前に連れてくると、自己紹介をした。

「私は、今上洋一といいます。こちらは妻の綾子、そして、娘の美奈です」

紹介された二人は源川たちに挨拶をした。男——今川洋一はソファに座って源川に言った。

「あなたのところにこの予告状が届いたというのは妻から聞きましたが、もう少し詳しい事情をあなたの口から説明していただけませんか？ 私には何がどうなっているのかさっぱりわかりません」

洋一に言われ、源川はここに来た経緯を述べた。

「……というわけなんです、正直私にも何が起きたのかは全く分かっていない。この予告状が悪戯である可能性も十二分にあるわけだ。ただ、こんなものが届いてしまったのは、お知らせしないわけにはいきませんので、参上したのです」

「落ち着いてみると、どうも悪戯のような気がしますね。こんな山中の家に殺人予告だなんて、なんだか現実味が無い」

「確かにそうですが、腑に落ちないところもあります。この予告状が悪戯だとすると、嘘の目的として考えられるのは三つです。

その一、私に無駄足を踏ませるため。つまり、この予告状の内容が虚偽ならば、私がここまで来たことは無駄だったわけですから、私は意味もなく時間と労力を消費したことになる。これが目的だった場合、私に無駄足を踏ませるのであれば、わざわざこの山を選ぶ理由はありません。しかし、予告状を送った犯人はこの山中にこんな家があることを知っていますので、場所の指定は意図をもって行われていると思われまます。

その二、私を探偵事務所から遠ざけるため。この場合、私が探偵事務所にはまずい理由があったということです。しかし、そのような理由に心当たりはありませんし、この場所を指定する必要もない。

その三、あなたの方に迷惑をかけるため。要するに、私たちをあなたの方のもとに向かわせ、あなたの方の平穏を乱そうとした、ということ。しかし、この場合、いささか手口が回りくどすぎる。私に予告状を送るよりは、あなたの方に送った方が何倍もスマートだ。

殺人予告には確かに現実味が欠けていますが、殺人予告が嘘だとしても、嘘の殺人予告を出した意図がつかめない……。何とも不可解な予告状なので「す」

源川の説明を聴いて、洋一はううむと唸った。そして……。

銃声が響いた。

途端に胸を押えて前のめりになる洋一。彼はソファをずり落ち、床にうずくまったような姿勢で倒れた。

「お父さんっ」美奈が叫んだ。

綾子も洋一に呼びかけ、走り寄ろうとした。

「待て！」

源川の声で全員が動きを止める。源川は近づいて倒れた洋一をのぞき込むように見て言った。

「心臓を撃たれたらしい。おそらく即死だ」

「そ、そんな……」美奈は両手で口を押えた。

「広津君、警察を。この家の脇に車が止めてあったから、ここまで車が来ることはできるはずだ」源川は素早く指示を出す。

「わ、わかりましたあっ！」広津は携帯電話を取り落としそうになりながら答えた。

「さて、凶器だが——」とあたりを見回す源川。「——そこか」

源川は舞台手前の、ちょうど彼がさきほど観客に向かって事情説明をしていた場所まで移動した。そして、懐からハンカチを取り出して何かを拾おうとした。が、途中でやめた。

いったい何を拾おうとしたのかはわからない。舞台手前の横一列に並んでいる照明器具がそれを隠しているのだ。

(凶器を探していたようだから、きっと銃か何かが落ちているんだろうけど、

どうして拾うのをやめたんだ？

広津が源川のところを駆け寄ってきた。

「先生、通報しました。……あ、それ、銃ですか？」

「ああ、そうだ」源川は言った。「広津君、手をかざしてみたまえ。ただし、触れるんじゃないぞ」

「え？ はあ……」広津は言われた通り落ちていよう銃に手をかざした。「……あ、熱気が伝わってきますね。この銃、相当熱いんじゃないですか、先生」

源川は頷いて、「おそらく数百度あるはずだ」

「ほお、数百度ですか。そりゃあすごい」

広津が間の抜けた声を上げる隣で、源川は腕を組んで考えている様子だったが、やがて言った。

「わかったよ、犯人が」

その言葉に全員が源川の方を驚いて見つめた。

「え、もうわかっちゃったんですか？ 誰なんです、犯人は」広津が言った。

「待ちたまえ、広津君。結論を急いではいけない」

「じゃあ、過程を早く話してください」

「君が話し始めるのを遅くしているんだ。……まあいい。まずは彼が殺された時の状況の整理からだ」

（おいおい、展開が速すぎないか？ 洋一氏が狙撃されたかと思うと、銃がよくわからないところから現れて、それが数百度に熱せられていると告げられた途端、犯人が分かっただって？ そんな無茶な）

観客の意志とは無関係に、源川は推理を始めてしまった。

「彼が撃たれた時、私たちは誰一人として拳銃を持っていなかった。それはお互いに証言できる。ここには銃の引き金を引ける人物はいなかったのだ。

しかし、この部屋からは凶器と思われる拳銃が発見され、しかも、それは高温に熱せられていた。これらが指し示す事柄は一つ。

銃は暴発したのだよ。数百度に熱せられた銃が暴発したことにより、洋一氏は死んだのだ」

「先生、でも、銃はどうしてそんなに熱くなっちゃったんですか？」

「照明だよ。この舞台手前に並ぶ舞台照明と、上から照らす三本のスポットライト。これらの照明によって熱せられ、拳銃は暴発したのだ」

（……はい？）

「つまり、この事件を闇の中から動かしていた犯人は、この舞台でスポットライトを操ることのできた唯一の人物。すなわち——」

源川はそこで、真上を指さして言った。

「——照明さん。あなただ！」

（そんな馬鹿な！）

危うく声を出しそうになった。

「あなたは劇が始まる前に拳銃を舞台手前に配置しておいたのです。銃口をソファが置かれる方に向けておけば、自分で狙わなくても彼が勝手にソファに座って当たってくれるのだから、拳銃をいつ置こうが関係ない。劇が始まってからは、舞台手前の照明をつけ、三つのスポットライトの光を拳銃に向けて照射するだけでよかったです。そうしておけば、白熱電球の熱によって銃は少しづつ熱くなっていき、いずれ暴発する。あなたは舞台全体を照らす照明がついていた間も、スポットライトをつけて銃を熱し続けていたのです」

「なるほど、そんな方法で殺人が行われたとは、これっぽっちも気づきませんでしたよ。さすがは先生だ。神様、仏様、源川様ですねえ」

広津は源川を過剰なほど褒めた。

（いやいや、ない。ないよ。これはない。構造にメタ要素が入り過ぎだし、

このトリックは何？ 白熱電球の熱で銃を暴発させる？ 無理無理、無理だよこれは。いや、不可能ではないかもしれないけど、ちょっとついていけないって)

劇を見ているだけなのに、自分が案外動揺してしまっていることに気づいて、深呼吸する。

(……よし、もうあら捜しをしてもしようがない、諦めよう。気にしちゃ駄目だ)

広津が源川に訊く。

「ところで、犯行予告の件はいつたいどうなるんです？ 照明さんは何のために先生に予告状を？」

「それはもちろん、私をここに呼ぶためだ」

「しかしながらですね先生、先生を犯行現場に呼ぶだなんて、それじゃあ捕まりにいくようなもんでしょ？ そんなこと犯人がしますかねえ」

「それがするのだよ、広津君。彼は自分の犯行だと暴いてほしかったのだ」

「はあ、それはいつたいどういう意味で？」

「そのままの意味だ。私に犯人だと指摘されることこそが、彼の目的だったのだよ。だから、トリックについても、銃が異常に熱いことがわかればすぐに発覚するようなトリックを使った——」

源川は上を向いた。

「——そうだね照明さん。さあ、降りてきて動機を告白してはどうだい？ 舞台はもう整っているのだから」

そして、明かりがまた落ちた。探偵だけがスポットライトで舞台上に浮かび上がっている。

そこで、探偵は観客に向き直り、

「照明さんがこの事件を起こした理由。それはこれが劇であることを考えれ

ば想像がつかます。彼はある台詞を言うためにここまでのことをしたのです。あるいは、私たちは、彼にその台詞を言わせるためだけに存在したと言っても過言ではない——」

探偵は上手の方をちらりと見た。

「——さて、照明さんが降りてきたようですよ」

彼は観客に一礼し、照明さんに場所を譲るような動作をしながら姿を消した。

(何だろう。照明さんが事件を起こす理由が、ある台詞を言うためだった？ どんな台詞だ……?)

照明さんがスポットライトのもとに現れると、ゆっくりと舞台全体の照明がついた。いつの間にか、役者たちは姿を消し、扉やソファもなくなっていた。

しばらくの間、静かな時間が流れる。

どんなセリフが待っているのかと、無意識のうちに唾を飲みこむ。

「俺は——」

照明さんの声は、少し震えていた。

「ずっと、ずっと前から——」

彼は涙ながらに叫んだ。

「——脚光を浴びたかったんだよおおおおうっ！」